

平成17年9月6日大水害

あれから10年

>6<

教訓は生かせるか…

杉尾 哲氏 基調講演
平成17年台風14号大水害の教訓



平成17年の台風14号は非常にゆっくりとした速度で、九州の西海岸をかすめて北上し、非常に長い間、宮崎に集中的に雨を降らせました。

また、秋雨前線と台風14号の雨が一緒になった大雨でした。台風14号の真ん中が九州の西側を通ると、ちょうど大雨が降る場所が東海岸にやってくるということになるんです。

秋雨前線と台風が一緒になった災害はこれまでもいろいろと起こっており、代表的なのは東海豪雨災害です。新川で堤防が壊れて、名古屋の市街が浸水して大変だったという事です。

名古屋地方気象台では観測史上最大(時間雨量、日雨量)の雨で、調べてみると600ミリでした。台風14号では気象台の公式の記録で

神門が1321ミリなんです。ですが、県が測定した非公式の値では1972ミリです。

日本の1年間の平均降雨量が1700ミリとか1800ミリと言われていて、それがたった3日か4日くらいで降ったという事なんです。ほとんどない雨だったということになります。

宮崎県と熊本県との県境には非常に高い山がありますので、名古屋と違って、雨雲がその山に邪魔されて東側にバサッと降りまし

た。(山間部に多く降り)宮崎市とか延岡市にはあまり大して降っていないという特徴のある雨でした。

県内の大きな川では大体9月5日の夜半から6日の昼にかけて30ミリから50ミリという雨がずっと降り続けました。1時間に50ミリというのは「バケツをひっくり返したような雨」と言われますから、そんな雨がずっと降り続いたということになります。

延岡市の松山観測所では、5日の夜半から水位が上がって、午後11時半に避難勧告が出ました。夜中にかけてさらに水位が上がって、「これはまずいぞ」という話になって、朝方8時半になって避難指示が出たんです。

その後、午前10時に計画高水位を超えて、それが7時間ずっと超えたままでした。計画

五ヶ瀬川の氾濫で浸水した住宅地(平成17年9月6日午後2時すぎ、延岡市古川町)



高水位というのは、堤防を計画するときに基準になる水位というところから、危ない状態が7時間も続いたということになります。しかも、延岡ではお屋敷にはいろいろ

な箇所でも堤防から水があふれました。五ヶ瀬川の上流の方では高千穂鉄道の鉄橋があたりこちで落ち、山崩れも起きました。それから下流は、川の水があふれて、陸地の家が被害を受けたのです。

プロフィール 九州大学工学博士。宮崎大学名誉教授。NPO法人大淀川流域ネットワーク代表理事、河川生態学研究会五ヶ瀬川水系研究グループ代表など、九州管内の河川における学識者として活躍。土木学会台風14号災害緊急調査団長を務めるなど、五ヶ瀬川では平成9年、17年と2

度になたる激特事業にも携わった。五ヶ瀬川かわまちづくり検討会、五ヶ瀬川分派施設技術検討会などの委員長も歴任している。

防災・減災を考えるシンポジウムから――

9月5日夜半から30〜50ミリの雨

計画高水位超え 危ない状態7時間も